

男が漆黒の馬に跨り、ソルバークスの正門をくぐった瞬間に辺りの空気が張り詰めた。場所はオーラッド通り。ソルバークスの正門から真つ直ぐに王宮へと伸びるこの都の大通りである。

本来であれば、外敵からの攻撃に備えて複雑に設計される筈の王宮へと続く道である。しかし、このソルバークスはそういつた城塞都市の常識を無視し、正門から王宮に至るまでの道を芸術的とも言えるまでに整備してあった。その秘密は道の至る所に仕掛けてある運河の存在にある。

ソルバークスを縦横無尽に走る運河は、都の南から西へと流れるアレソフォート大河から水を引き込み、船を利用した交通の利便性を図るとともに、王宮を幾重にも囲んで外敵に備えるように設計されている。オーラッド通りもその例に漏れず、運河を跨ぐ橋がいくつもかかり、外敵が侵入して来た場合はその橋を落とすことによって侵攻速度を削ぐ役割を担っていた。

男は黒い鎧の威丈夫に囲まれ、堂々とした姿で橋を渡っていく。その姿を幾重にも取り巻いたソルバークスの市民の視線が追う。正式にはそう公表されていないにも関わらず、市民には敵対国だという認識が行き渡っている北の帝国 ジェスターメント。その国の政治的な判断を任されていると言われている男をひと目でも見ようとして集まった市民達の群れ。その視線は決して好奇のものではなく、明らかに刺さるような刺々しさも含まれている。しかしその群衆など映っていないかのように、男の視線はただひたすら正面に見えてくる筈の王宮を見据えているようであった。

男の名は、ジョシユア・グーリッジ。北の水壁というふたつ名を持つ、北の大国の宰相である。がっしりとした体格を黒の外套に包み、オーラッド通りをゆっくりと進んでいく。灰色の長髪を風になびかせて堂々と進むその姿は、盛りを過ぎた年齢にそぐわぬほどの精気に満ちていた。王宮を睨むその灰色の瞳は僅かな揺らぎもなく、強い意志を伺わせる。

ジョシユアと彼を護衛する騎士達がオバス広場の側を通る。ジョシユアはまるでつい先日起こった出来事を知っているかのように、視線をオバス広場へと向けて馬を止める。彼の跨る馬は気性の激しさを思わせる仕草でジョシユアの手綱に抵抗を示したが、やがてその抵抗が無駄であることを知ったのか大人しく彼に従った。ジョシユアの停止により、彼を警護する騎士団達も足を止める。

群衆が息を呑む。この沈黙がいったい何を意味するのか。しんと静まりかえった中、群衆の中に紛れていたキースは、自分の首筋がちりちりと逆立つのを感じた。嫌な予感がする。それもとてつもなく。

キースは馬の手綱を握り、オバス広場に正対したジョシユアの左後ろの虚空を睨む。

何かが・・・そこに・・・

ジョシユアは外套を翻し、唐突に馬を下りる。

群衆の中にざわめきが広がった。

辺り一面に黒々とした焼け跡を残すオバス広場を前にジョシユアが跪く。

黒い騎士達はその行動がさながら予定されていたものであるかのように身じろぎもしない。

助手が一瞬天を仰ぎ、外套の中から右手を天へと突き出す。

群衆のどよめきは更に波紋のように広がっていく。

差し伸べられたようにも見える右手はそのまま外套の上から胸元へとあてがわれる。

どよめきが驚愕の声へと変わる。

彼はそのまま黒い焼野へと祈りを捧げた。

驚愕の声が極まった瞬間、それは訪れた。

ジョシユアの右後ろの虚空が裂けた。その虚空の向こうから黒い甲殻類の腕が伸びる。東部で様々な術を目の当たりにしてきたキースでさえその異様さに咄嗟の判断もままならなかった。触手とジョシユアの狭間を影が遮った。鈍い音がして触手の軌道が逸れる。

ジョシユアの驚愕の表情を予想したキースは、その予想が裏切られた事を知る。振り返るために祈りの姿勢からあげた顔にはうつすらとした笑みが浮かんでいた。

虚空の裂け目からは、全身に黒い触手を生やした異様な姿の男が、その全身を露わにしようとしていた。

ジョシユアと男の間に割って入った瘦身の騎士は、騎士の象徴である筈の剣を触手の一撃で叩き折られていた。

弾け飛ぶ剣の切っ先を地に落ちる寸前にかむその動きがそのまま触手の男へ一撃を加える右の後ろ蹴りとなる。触手の男は騎士の蹴りを触手の一本で受けた。そのまま受けた蹴りを振り払うかのように触手が物凄い勢いで宙を薙ぐ。重装備の鎧を身につけた騎士の身体が軽々と宙に浮き上がった。

そのまま吹き飛ばされるかと思われた瞬間、瘦身の騎士は右足にかかった衝撃を軽く蹴って上へと逃がした。騎士の身体はそのままその場で腹部を中心に空転するかのよう回る。驚異的な反射神経とボディバランスであった。衝撃を上へ逃がした分だけ騎士の足の勢いは地面へと向かい、それとは反対に上半身が触手の男の真下から浮かび上がってくる。その手には触手の男に折られた剣の切っ先が握られていた。縦に回転する力までをも利用して、騎士がそのまま折れた剣の切っ先を男の顎へと叩き付けた。

「ぐおっ！」

自らの触手が生み出した高回転に反応できなかった男が、左頬を押さえてよろめく。騎士が狙った一撃は男の右掌に阻まれていた。しかし叩き付けられた剣の切っ先は男の掌を貫き、左頬をかすめて傷を負わせている。右掌と頬からあがった血しぶきが数本の指と共に地に落ちた。

どう見ても瘦身の騎士の闘いは、剣を主体として戦う騎士のスタイルとは一線を画していた。

ジョシユアを警護する役割だった他の騎士は、触手の男と瘦身の騎士の暴風のような闘いを呆然として見守っているだけであった。

身を捻って回転を殺した瘦身の騎士が、脚に仕込んであった短刃を逆手に構える。ゆるく弧を描いた漆黒のククリであった。

触手の男が体勢を立て直し、ジョシユアを目で追う。

ジョシユアの姿が消えていた。

キースには、ジョシユアが男の背後に唐突に現れたように見た。

瘦身の騎士が、全身のバネをたわませて触手の男へと走った。バルドは騎士を迎え撃とうと、黒い触手を広げようとした。

バルドは自らの身体に生えている触手が自分の思い通りに動かないことに気づいた。

背後の殺気。

バルドの背筋に灼熱の悪寒がはせる。

背後に気を取られた瞬間に両の踵に衝撃が走る。手に構えたククリがフェイントであることに気づいた時は遅かった。バルドの両脚は騎士の回転する後ろ蹴りになぎ払われ、身体が宙に浮くのを感じた。地面へと沈み行く感覚の先に、空をバツクに立つ男の姿が見えた。

ジョシユア・ゲーリツジ。

その右の掌が差し出され、バルドの視界を覆う。

なるほど。そういうことが。

バルドは意識を絶った。

「おいっ！」
パニックに陥った群衆の中でもみくちやにされながらキースは右手を伸ばした。
「やめろっ！」

地面に仰向けになつたバルドの顔にグリフォンの右手がかかる。次の瞬間、グリフォンの掌がはぜたように見えた。
ドンッ！

鈍い音を立ててバルドの頭が消し飛ぶ。同時にバルドの身体から灼熱の炎が噴き出した。
「詠唱なしの魔法だと・・・」
呆然としてキースがつぶやく。

魔法は魔力を異界から引き出すための手順が必要となる。その威力が強い術であればあるほど複雑な手順と触媒を必要とするもののはずである。グリフォンが行ったのは、その手順や触媒を一切無視したかのように思える術の発動方式であつた。

バルドの身体が燃え上がる。ここに来てようやく、グリフォンの護衛としてついていた騎士達がグリフォンの周りを固めて騒ぎを治めようとし始めた。群衆を抑えていたラダロス白鎧騎士団の面々も事態の収拾をはかり始める。

バルド・・・。
確かにあの男はバルドだつた。しかし、あの変わり果てた姿はどうしたというのだろう。

キースは考えを巡らせながらもパニックがようやく収まりつつある周囲の様子を見る。蒼白な顔色をして怯えている者、今にもつかみかからんばかりの勢いを白鎧騎士団に止められている者、その反応は様々である。しかし、悪い意味でグリフォンに対する感情が芽生える事は間違いない。相手は敵対国の宰相である。その宰相が襲いかかる化け物に対して冷静に対処し、危なげもなく撃退してみせたのだ。それほどグリフォンの対応は鮮やか過ぎた。これによって、ジェスターメント帝国 に対する市民の評価は一変するだろう。優れた武器だけでなく、強い騎士。そして、恐ろしい魔法を操ることもできる国。

すべては良く出来たデモンストレーションということか・・・。
キースはあの化け物に立ち向かつていった瘦身の騎士の姿が見えないことに気づく。周囲を見渡してもどこにもいない。グリフォンの周囲を固める騎士は、全員屈強な肉体を誇る騎士ばかりである。瘦身というだけでも異色の存在であるのに、その上折れた剣をも躊躇なく振るつ闘い方。それはキースやシータの闘い方と似通っているだけに、無視できない存在であつた。

それを見失うとは・・・。

キースは苦笑いを浮かべる。

「犯人はバルド・オーウエンス！」

突如、オバス広場前に残っていた群衆の中で野太い声が響いた。

「ラムシュタイン王国の騎士団員が我が国の宰相の命を狙つたのだぞ！」

声の主はグリフォンの横で黒い騎士達に指示を与えていた壮年の騎士であつた。

キースはこの事件が厄介な問題を抱え込んだことを知つた。

「どうしてそんなことが分かるんだ？」

群衆の中から野次が飛ぶ。

「あの男が落としていった指輪だ！」

壮年の騎士がそう叫んで右手にしまった指輪を掲げた。その指輪には確かにガルフィディ騎士団の紋章と、持ち主の名前が刻印されている筈だ。騎士団入団の際に全員に与えられる身分証のようなものである。

諜報活動を主としているガルフィディ騎士団に身分を明らかにするものを身につける習慣はない。むしろ、極力身につけないようにしている筈のだが、ここでそれを主張しても騎士団

の活動内容が内容だけに更に厄介な問題になることは目に見えている。

「さあ！どう申し開きして頂けるのかな。ラムシユタイン国主に謁見させて頂きますぞ！」

「完全にハメられたなこりゃ・・・」

キースはそうつぶやいてその場を離れていった。